

# 布施の心

本多 克也

(略字)

文・徳永 耕一

## 【再起と運命の出会い】

一九六〇年（昭和三五年）四月、上京以来初めて長崎へ帰郷した。しかし、五年ぶりだというのに、手土産はほとんど持たず、土産話もない、不本意な帰郷だった。

大手を振って歩けない無念さは、石川啄木の「ふるさとの詫なつかし停車場の人混みの中にそを聴きにゆく」の心境だった。帰郷中の母の心配もひしひしと伝わってきた。東海道本線は一九五六年に電化されて、日本の動脈としてますます活気を帶びていたが、私には孤独な長い旅だった。故郷山村では、傷心を癒す間もなく、帰ってきて早々に地元で働き口を探した。

しかし、当時はまだ長崎は雇用がほとんどない状態で、無駄な日いちが過ぎて行くばかりだった。

そんなある日、名古屋の親戚から「名古屋の植屋（つちや）という会社が人を募集している」という情報が入った。あらかじめ、親戚やあらゆるつてに仕事の情報をくれるようにお願いしていたのだ。私は、藁にもすがるような思いで、面接を受けるために名古屋へと急いだ。

私は、藁にもすがるような思いで、面接を受けるために名古屋へと急いだ。

面接を受けた会社は、株式会社植屋といつて、自動車関連を中心とする塗料関係を主に取り扱う会社で、アメリカの大手化学メーカーデュポン社の代理店もしていた。（※デュポン社は、世界で四番目に大きい化学会社で、ライターのデュポンとは別）

面接を主導した方は、幹部社員の岡野良一さんといった。



岡野良一氏

2023年3月本多産業株式会社は  
設立50周年を迎えます。

 本多産業株式会社

【本 社】神奈川県横浜市戸塚区戸塚町3814  
TEL:045-869-1133  
【長崎工場】長崎県雲仙市吾妻町布江名677  
TEL:0957-38-3520

豪快な方で、既成観念に捉われずに物事を仕事本位で考えるタイプの方だった。その初めての仕事が、短い面接のやり取りの後、岡野さんが面接を締めくくつた。

「よし、採用だ」

その一言で採用が決まった。いや、その時に私の人生が決まったと言つても過言ではない。一九六〇年の五月だった。

私は大学時代、アルバイトは山ほどしたが、正式に会社に勤めるのは今回が初めてだった。その初めての仕事が、私がずっと望んでいた化学関係の仕事だった。

そしてこの時以来、八十六歳になる今日まで、化学関係ひと筋で歩いて行くことになった。

もしラッキーにも地元長崎で仕事が見つかっていたら、名古屋の植屋に行くこともなかつたし、岡野さんと会うこともなかつた。化学とは関係のない道を歩んだかも知れない。人生、何が味方するかわからないものだ。

翌日出社すると、早くも岡野さんは仕事モード全開で、

話しかけてきた。二年間工学部にいたんだから、基礎はできているだろう」「バイト尽くめでしたから、基礎ができるか分かりません」と私が自信なげに答えると、「まあいいだろう。俺が仕込んでやる。勉強しろ」と、背中を押してくれた。

ところで、日本の戦後の自動車産業だが、一九五〇年以前は連合国軍GHQにより乗用車の生産が禁止されていて、細々とトラックなどが作られているだけだった。しかし、一九五〇年の朝鮮戦争をきっかけにして、ようやく乗用車の生産が認められるようになり、トヨタ、日産をはじめ自動車業界は一気に活気づいていた。